

★マリガヤハウス便り★ ★河野 尚子★

皆様、こんにちは。いかがお過ごしですか。2018年3月も終わりに近づき、1年の1/4がおわりますね。フィリピンはまだ乾期に入っていませんが、日中は太陽がじりじりと照り付け、とても暑い日が続いています。子ども達は3月下旬から始まる夏休みに向けて、学年末テストの真っ最中です。有終の美を飾って、思いっきり夏休みを満喫してほしいと思います。

【マリガヤハウスインターン受け入れ】



2018年2月から1か月間、フィリピンのマリガヤハウスでインターンシップをさせていただきました、ルーテル学院大学社会福祉専攻3年生の山内崇意です。私は、これまでフィリピンに行ったのは初めてどころか、海外に行った経験すらありませんでした。そんな私がフィリピンでそしてマリガヤハウスでインターンシップをしようと思った動機は、大学で社会福祉を専攻していて、アジアの諸外国の社会福祉を学ぶ講義でJFCと呼ばれる子どもたちが抱える問題について知ったからです。

私たち日本人は、日本で生まれ、当たり前のように日本国籍を持ち、母親と父親から子どもとして認められています。そして多くの場合が父親と母親のいる家庭で育ち、子どものうちは学校へ行き友達と楽しく過ごし、食べることに困らず、明日を生きられるかどうかを心配することはありません。しかし、JFCの中には、日本人の親を持つ子どもに生まれながら日本の国籍を持たず、父親との記憶がない子どもたちもいます。そしてJFCが大きくなるにつれて自分にはなぜ父親がいないのか、父親は今どこで何をしているのか、自分は一体何者なのか。残された家族はどうやって生きていけばよいのか。もし仮に私がJFCだとして大きくなった時に父親の存在がなかったら、会いたいと思うだろうか、どんな理由があるにせよ、説明も無しに自分たち家族に去ってしまった父のことを許すことが出来るだろうか。最初は、JFCや母親たちの気持ちを理解するには難しく考えた時に非常に辛い思いがしました。私より小さい子どもらがそのように精神的にも経済的にも不安定な家庭環境で育つことを想像した時のリスクは計り知れず、私はそれまで日本とフィリピンとの間にこのような問題があることを知りませんでした。そしてそのような問題に対して支援をしている団体がJFCネットワークだと知り、実際にフィリピンの現地事務所であるマリガヤハウスがどのような取り組みをしているのか興味を持ったからです。





インターンシップの内容

マリガヤハウスのインターンシップでは、JFCの国籍取得のために必要な出生証明書などの翻訳作業や実際にクライアントとマニラの日本大使館に行き国籍取得申請の場面に立会いをさせていただきました。書類の翻訳などこれまで経験したことがなく戸惑いの連続でまた私自身は英語やタガログ語を話したり、聞いたりすることが出来ないでクライアントやフィリピンの人々とのやり取りに大変苦労しましたが、多くの方が

温かく迎え入れてくださり、徐々に人々の考えや気持ちを理解できるようになりました。

他にもクライアントを対象としたオリエンテーションやワークショップにも参加させていただきました。また現地のJFCユースのお宅で計二日間ホームステイをさせていただいたことは大変貴重な経験となりました。

ワークショップでは、男性と女性との間に生じるジェンダーの問題を身体的、生物学的、社会学的視点で捉え私もクライアントたちに混ざり学ぶことが出来ました。またフィリピンのワークショップは日本のものに比べ賑やかであり女性たちの積極的な参加の姿勢が見ることが出来ました。

オリエンテーションでは、マリガヤハウススタッフの河野さんからJFCネットワークやマリガヤハウスの役割や援助のプロセスなど、これからどのようなことが必要となるのかをクライアントが理解できるよう説明がされ、クライアントと支援者が共有のビジョンを持ち円滑にプロセスを進めていけるようお互いが協力していくことの重要性を理解することが出来ました。今回のホームステイでは、私は奨学金の申請を行っているJFCがどのような生活をしていて、どのような課題があるのかをアセスメントをするために訪問しました。言語の違いによるコミュニケーションをとることの難しさと文化や価値観の違いによる理解の難しさに苦労しましたが、その家族が実際にどのような場所でどのような生活をしているのかを目で見て一緒に生活することによって肌身で感じる事が出来ました。また子どもたちと、最初は言葉も通じず打ち解けるのに時間がかかりましたが、一緒に遊んだり同じ部屋で寝るなどのふれ合いを通し今フィリピンの子どもたちの中でどのようなことが流行っているのか、子どもたちはどのようなことが好きなのか、日本と違うところや同じところはどのようなことを学ぶことが出来ました。それらの経験の中からこの家庭のJFCの父親に対するなぜアバンドンしたのかという思いやJFCネットワークに対する奨学金の提供による支援によって大好きな学校生活を送れることへの期待をフィリピンの家庭にホームステイをすることで知らることが出来ました。この家のJFCは年下の兄弟たちの面倒をみたり、家族の家事や母親の仕事の手伝いも行っていました。また学校の成績は学年で常にトップクラスに入り、将来は貧しい人や病気の人を助けられ



るような医者になりたいと言っていました。計二日間のホームステイが終わり、JFCとその家族と最後別れの挨拶の時に「私を家族の一員だから、またいつでもおいで」と言ってくれた時はとてもうれしい気持ちになりました。子どもは、日本やフィリピン、どんな場所で生まれても人の間に生まれた子であることには変わりはありません。子どもは親を選ぶことは出来ません。ゆえに生まれてくる子どもに責任はないのだと思います。そして子どもたちには平等に教育や生活を営む権利を持ちアイデンティティを持つことが出来る社会を作っていくのが私たちの役目だと強く感じました。今回、私がホームステイをした家のJFCも勉強が好きでこれは彼女のアイデンティティを確立する一つの要素だと思います。しかし、彼女の家には十分な勉強できるスペースや環境がなく家の床で勉強する様子を目にしました。JFCネットワークから奨学金をうけることができるようになれば彼女が安定して学業を続けられることができ、将来彼女が経済的に自立することによってこのことが保障されることが彼女とその家族を支える希望だと感じました。

マリガヤハウスでの一か月のインターンシップを通して

JFCネットワークやマリガヤハウスでは、ただ法的支援により父と子を結びつけるだけでなく子どもの権利の保障をするための支援や当事者同士のつながりを支援することによる精神的ケアを行っていることを知りました。また様々な困難に直面しながらも逞しく生きているJFCやその家族の姿を見て私自身も勇気づけられました。そして今回このような体験が出来たことを私自身の中だけで完結するのではなく、他の人にもJFCの存在とそれを支援している人々の取り組みを知ってもらえるよう伝えていきたいと思いました。

JFCネットワークの皆さま、マリガヤハウスの皆さま、そしてフィリピンのJFCとその家族の皆さま本当にありがとうございました。

マリガヤハウスの主な活動

2018年12月

- JFCネットワーク奨学生・ソロプチミスト奨学生・在日フィリピン大使館奨学生合同会議を開催。
- 相談者オリエンテーションを開催。
- マリガヤハウスクリスマス会開催。約40人のJFC母子達が参加。

2018年1月

- JFCネットワーク奨学生・ソロプチミスト奨学生・在日フィリピン大使館奨学生合同会議を開催。
- 新規相談者のためのオリエンテーションを開催。
- 新規クライアント登録会議開催。
- JFCネットワーク東京事務所理事会にスカイプを通して参加。

2018年2月

- JFCネットワーク奨学生・ソロプチミスト奨学生・在日フィリピン大使館奨学生合同会議を開催。
- 新規相談者のためのオリエンテーションを開催。
- JFCユース母子のためのオリエンテーションを開催。
- 新規クライアント登録会議開催。
- フィリピン大学社会福祉・地域開発学部社会福祉修士課程フィールドワーク学生を受け入れ。マリガヤハウスの母親達へのワークショップを実施。
- 養育費請求裁判を起こす母子への家庭訪問を実施。

パグ アサ
PAG-ASA

JFC 奨学金基金報告
パグアサー夢・希望
2018年3月

【新 JFC 奨学生候補 ハルミ・トミタさんへの家庭訪問】

社会的・経済的状況



JFCハルミ・トミタさん一家が暮らす家は全面コンクリートでできており家の中には居間、子ども四人の寝室、物置部屋があります。この家は JFC の現在のフィリピン人の父親の妹の家であり一家は六年ほど前から住んでいます。その妹は現在、ドバイで暮らしていますが、帰国間近であり、家族は歩いて五分ほどのフィリピン人継父の家に引っ越す予定ですが、家の外面は木材、屋根はトタンでできており、雨の日は雨漏りをします。床は大人が歩くとへこむ程の厚さの板でできて

います。現在の家と比べ非常に狭く、家の中に子どもたちが勉強するスペースはなく、ハルミさんにどこで勉強するのかと尋ねると床で勉強をすると答え、またフィリピン人継父の寝室に四人で寝ることになるので子どもたちの今後の成長を考えると不自由な生活になることは決定的です。またキッチンや水道はないため、この家の建物の隣に一人で住む継父の妹の家を利用させてもらう事になるようですが、彼女はハルミさんの一家に対して協力的ではないそうです。

家族は、長女である JFC ハルミさん（12歳）と母親ルーデスさん（40歳）、継父（56歳）とその間に生まれた3人の子ども（次女；10歳、長男；9歳、次男6歳）の計6人家族です。母親ルーデスさんには、遠方に住む母親、二人の兄と姉がいますが、姉以外とはコミュニケーションはなく、姉とも電話による相談のみで、金銭的援助は受けていません。また継父には5人の兄弟がいるがその母親の介護をするのは継父のみです。

一家はドバイに暮らす現父親の妹から送られる毎月 5000ペソほどの仕送り（母親の介護費としての意図が大きい）とルーデスさんのアルバイトによる月収 2000ペソで生活しており、この中から毎月の食費 3000ペソ、電気代 800ペソ、水代 500ペソ、子どもの交通費や食費として 200ペソほどお小遣いとして渡し、残りを介護などその他の費用として充てています。お金が足りなくなった場合には、母親がハルミさんの事情を知る友人から経済的支援を受けることがあります。よって継父のドバイに住む妹からの金銭的援助に依るところが大きく、経済的支援を断られた場合、一家は困難に陥る可能性があります。また彼らは健康保険も有していないため、家族が病気になった場合、大きな危機に直面することになります。





継父は、以前は定職に就いていましたが解雇され、現在は彼の母親の介護のため仕事はしていません。ルーデスさんは、週に二日、土曜日と月曜日、朝9時から夜9時まで家から歩いて5分ほどの洋裁工場でアルバイトをしています。彼女がアルバイトの時は継父が子どもたちの世話をしますが、母親の介護のために家を離れるときは家には子どもたちのみとなるのが家族の大きな不安です。

JFCの状況

現在は12歳であり、公立のポロ・ナショナル・ハイスクールの一年生です。彼女は、シャイで物静かな性格ですが、年下の兄弟たちの世話や皿洗いや家族の手伝いを積極的に行い、母親が家に持ち帰ってきた洋裁の仕事を手伝う様子が見ることができました。また非常に勉強熱心であり、成績も良く、学年でも常にトップクラスを維持しており、学校では友達とも仲が良く、家に招くときもあり、母親いわく友達という時は、とても楽しそうに過ごすそうです。なので、学校に行き勉強をし、友達と過ごすことが彼女の今の心の拠り所であると感じました。将来は貧困に困る人や病気の人々を助けるために医者になることを目指しています。ルーデスさんは彼女の義母と子どもたちとの同居を不安視しています。日本人の父親に対しては、あまり記憶がないようですが、養育費の支払いなど援助の提供を求めています。JFCネットワークには、父親との結びつきを求めることや奨学金による援助の機会を与えてくれるよう期待しています。

評価・推薦

経済的にも環境的にも圧迫された状況の中でハルミさんとその兄弟たちが暮らしていくリスクは非常に重大なものになります。ルーデスさんは、海外へ出稼ぎに行くことも考えましたが、子どもたちがまだ小さいため心配であり、難しいそうです。またJFCも母親の苦労や一家の状況を理解し、気遣い心配しています。ルーデスさんは、日本人の父親と連絡がつかなくなった当初は途方に暮れていたようですが、マリガヤハウスに参加し、他のクライアントとの交流を持つことで、前向きな変化が見られました。ハルミさんはマリガヤハウスが家から遠く行った経験はありませんが関心はあり、奨学金による援助とマリガヤハウスでの他のユースたちとの交流を持つことになれば、母子にとって精神的に大きな支えになると考えられます。ハルミさんはマリガヤハウスに対して、日本人の父親からの養育費請求の援助と奨学金提供による学業の継続ができるような支援を強く求めています。今回の奨学金を求める彼女は勉強が好きで、今後も継続して勉学を続けていきたいと強く願っています。彼女と母親の望みも一致して学業を継続していくことです。現在は公立の学校に通っているため授業料はかかりませんが、大学へ進学した際には、授業料等の学費が必要となるため現在の経済状況では大学への進学は厳しい状況です。彼女が学業を継続的に進んでいくことが出来れば安定した職業に就くことは十分に可能であり、そうなれば彼女自身が経済的に自立した生活を送っていくことも十分可能です。

